この本の舞台うら

『16歳の語り部』

雁部那由多、津田穂乃果、
相澤朱音　語り部
佐藤敏郎　案内役
ポプラ社／2016年
19cm／220p
本体1300円

16歳の語り部について

NPOカタリバアドバイザー　佐藤敏郎

人は誰でも向きあいたくない現実がある。めんどうな仕事、受け入れたくない結果、会いたくない人、悲しい別れ…。子どもだって大人だって、多かれ少なかれみんなそうだ。3・11は向きあいたくない現実の典型だ。すべてが流されたガレキだらけの風景を見て、誰もが言葉を失った。

私は一昨年まで東日本大震災の被災地女川や東松島の中学校の教員だった。震災後の被災地の学校現場で一番考えたのが、生徒を3・11にどう向きあわせるかということだ。

そんな中、出会ったのがこの本で登場する三人である。那由多、穂乃果、朱音の三人。当時中学3年生、震災時は小学5年生だった。いずれも家が流された。

その頃は、体験を語り始めていた頃で、学校生活の中で何度か彼らの想いにふれる機会があった私は、もっと多くの人に聞いてもらうべきだと考えるようになった。

東京で三人が震災体験を語るというイベントを企画したのは平成27年8月23日。16歳の等身大の言葉は、想像以上に鮮烈だった。

「非日常の日々に最初はワクワクしていました。」

「報道でよく津波の写真が使われるけど、僕たちはあの中にいたんです。」

「教室には被災した子と、そうでない子が混在していて、自分たちを『被災組』と呼んでいました。」

「目の前で自分に手を伸ばしながら人々が黒い波に飲まれていきました。」

「友達が亡くなって、自分が死んだ方がよかったんじゃないかと思うようになりました。」

震災は大人目線で語られることが多い。こんな語りを聞く機会はあるようでいてなかなかない。参加者は皆、息を飲んで聴き入った。

東京の学生が質問した。「辛い体験を話すことはしんどくないか」

那由多は即答した。「次の命を救いたい。」

「体験していない私たちが震災について語っていいのだろうか」という質問もあった。大人でもよく聞く声だ。私たちも当事者でなかったら、同じ想いだったろう。

穂乃果が答えた。「体験した人しか語れなかったら、戦争はとっくに風化してしまう」

体験した人の語りを受けて、遠くの人、未来の人が語り継いでいく。世代や地域を越えない限り、風化してしまう。3・11もそうだ。

朱音はペットを流され、家を失い、親友を亡くし、どんどんネガティブになり、愚痴をこぼす日々の中で、その愚痴に耳を傾け、親身になってくれる存在がいることに気づく。

「私、生きていてもいいじゃん」

そして、語ることは、親友の死を無駄にしない方法かもしれないと考えるようになった。

語るようになった経緯は三人三様だが、それぞれ違うからいいのだと思う。時間がかかったっていいし、目的が違ってもいい。最初からうまく向き合えなくてもいいし、ダメだったらやり直せばいい。大人は、すぐに助言を与えたり、「つまりこうだ」と解説したりしがちだが、大事なのは答えよりも、向きあうことだろう。私自身、大人目線、教師目線で生徒を限定していたことに気づかされた。目からウロコだった。

足かせになっていたものは輪郭がはっきりしてくると、踏み台になり、次に進むことが出来る。災害時に限ったことではない。

あの日の話は、家を流されたり、身近な人が亡くなったりした話だ。でも、彼らが語るその先に未来が見えてくる。いつのまにか希望の話になる。

「あの日を語ろう、未来を語ろう」というイベントのタイトルはそんな彼らを見て、思いついた。

そこに、たまたまポプラ社の人が来ていたのが事の始まりだ。会が終わるとすぐに言われた。「これを本にしましょう。いや、しなければなりません。」一週間もしないうちに企画を作り、宮城に飛んできた。思ってもいなかった展開。2月には書店に並んだ。

那由多がこんなことを言っていた。「本の力って大きいですね。いつになっても、本の中の僕は16歳のまま語り続けてくれる…。生身の僕がいなくなるであろう100年後の世界にも残ってくれるといいなぁ。」

ページを開けば、彼らに会える。